別紙１－１

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※　　第　　号

氏　　名　金　肖豊

論　文　題　目　王安石の士大夫政治思想に関する研究

論文審査担当者

主　査　名古屋大学大学院法学研究科　教授　姜　東局

名古屋大学大学院法学研究科　教授　小野　耕二

名古屋大学大学院法学研究科　教授　田村　哲樹

別紙１－２

論文審査の結果の要旨

Ⅰ　論文の概要

本論文は、宋代の政治家である王安石を対象として、彼の政治思想を一次資料から内在的に再構成したうえ、その結果を知性史（intellectual history）の手法を使いながら、唐宋変革期の政治変動と照らし合わせることで、王安石の政治思想がもつ中国、そして、東アジアにおける重要性を発掘した作品である。

本論文の「はじめに」では、王安石の研究の現状と問題点が指摘されたうえ、研究の方法と意義、そして課題が提示された。王安石は、中国の政治史・政治思想史の系譜において非常に重要な位置を占めているが、彼に対する研究は、主に前近代中国における儒教的言説と、十九世紀の「西洋の衝撃」の後の近代学問によって行われてきた。その結果、王安石は、朱子学が正統思想とされた数百年の中国の歴史の中で、朱子学と異なるという意味で異端や邪説の提唱者とされ、士大夫の主流から批判を浴びてきたが、近代になっては「熙寧変法」という改革運動を行った実務的な政治改革家とみなされ、改革変法の先駆けと見做された。このような研究の流れからわかるように、正統と異端の枠組みを克服したうえ、政治思想家として王安石を取り扱った研究は、実に皆無に近い。本論文は、王安石の政治思想を朱子学に導かれた言説や近代西洋中心の視角から脱出させ、その本来の姿を取り戻す試みである。そして、王安石の政治思想に対する見直しを通じて、いわゆる「唐宋変革」という歴史的背景の中で、朱子学者が創出した新しい政治思想と王安石との関係性を、とりわけ、士大夫層の政治的関心がなぜ王安石のような中央集権体制の志向から、朱子学者のような「地方自治」的な政治・社会運動の推進に転向したのかという問いを中心に把握することで、中国の政治思想史に対する内在的な理解を深めようとしている。

本論文の第一章では、王安石の政治思想と政治行為との間に齟齬が存在することを、文献史料に基づいて論証した。この作業の主眼は、王安石の政治思想と有名な「熙寧変法」を分離させるところにある。すなわち、彼の政治思想に対する考察は、変法の過程の具体的な政策ではなく、著作や書簡などのテキストからなされるべきだということが、通説とは異なる本研究の方法論の中心である。具体的には、王安石の政治思想と変法との間に、大きな齟齬が存在したことを明らかにすることで、彼の思想を正しく把握するためには、それを一旦現実政治の複雑さ（権力闘争や皇帝意思など）から切り離し、思想的テキストそのものを中心とした検討を改めて行う必要性があることを提示した。

本論文の第二章では、厳密なテキスト分析を通じて、王安石の政治思想における

別紙１－２

論文審査の結果の要旨

本体論を考察した。王安石の政治思想における本体論の核心、すなわち「道」は究極の原理であり、政治を含むあらゆるものの出発点であるとともに帰結点であった。彼は抽象的な道が世の中のすべてに適用される一貫性の原理であると確信したのである。次に、王安石における「時」を検討して、不変な原理たる道と、相対性を有する時との関係を解明することで、王安石の政治思想は、外面的には変化したと見える場合もあるが、実際は原理の面において一貫性を保っていたことを明らかにした。以上の考察の結果、王安石の政治思想には、原理や方法などの側面から、後の朱子学者に見える儒学の政治思想の特徴が、ほとんど備わっていることが確認できたため、王安石の政治思想を道の原理性を信じた心性儒学の一派と位置付けることができた。

本論文の第三章では、王安石の最も重要な著作である『三経新義』に対する分析を通じて、彼の政治構想の具体像に対する考察を行った。『書義』・『周礼義』・『詩義』は、それぞれ君主の道である「人道」、礼の制度である「治道」、民間の風習である「風俗」に関する王安石の理念を説いたものであるが、この三つの問題が王安石の政治思想における核心的なテーマであると思われる。まず、王安石は君主に対して、「君主の無為」・「大臣の有為」というテーゼを掲げている。そこには、宋代士大夫の高まったアイデンティティーと「天下を以て己の任と為す」責任感が見えてくる。また、王安石は儒教の民本思想の持ち主であったため、民意を重視し、さらに「放伐」に対しても肯定している。しかし、王安石は民意も道に従うべきと考えて、民意の無制限な伸長も防止すべきことも主張した。結局、王安石の学説では、君主・士大夫・庶民の三者の中に、道統を代表する士大夫が、事実上、最も優位な政治的位置を占めることとなっている。次に、王安石は『周礼』を参照しながら、自分の目指した礼の制度が道の人間社会における具現であることを明らかにした。最後に、王安石の「風習を正す」方法論について、「内から外へ」・「上から下へ」という二つの手順を検討して、「教化は本（主要）」・「刑政は末（補助）」という二つの手段を考察した。このような手順と手段を取った王安石の議論は、いうまでもなく儒教の伝統を汲んでいるが、さらに具体的には朱子学の理念に非常に類似している。以上のような政治構想は、結局、士大夫という新しい政治の担い手が思っていた新しい時代の政治に対する総合的な見取図であったといえよう。

本論文の第四章では、王安石の失敗の原因を分析したうえ、朱子学が王安石の学を批判しながらもそれを継承し、また、克服して地方を中心的な舞台とする政治の幕を開いたことを論じた。「唐宋変革」の流れの中で、王安石が主張した士大夫主導の中央集権体制は、強化された皇帝独裁体制と対立することを余儀なくされた。王

論文審査の結果の要旨

安石は、このようなジレンマを克服できなかったため、彼による士大夫政治の試みは皇帝が支配する中央政界において行き詰まってしまった。そして、朱子学は王安石に学ぶと同時に、それと抗争しながら、ついに彼の未完の「士大夫政治」を新たな方向に導くことに成功した。このような意味で、朱子学者は王安石の「批判的継承者」であったといえよう。たとえば、王安石は、天地（全体、最大範囲）が道の完全性を保ち、万物の各々にはそれぞれに対応する道の一部しか存在しないといったが、朱子学者は「理一分殊」の説を唱えて、あらゆる物事が道の完全性を有すると主張するに至ったことは、この止揚と継承の両側面を明確に見せている。また、道の存在様態に対するこのような認識的な差は、朱子学を信奉する士大夫が中央政治から地方政治へ流れていった現象の政治思想的な原因といえよう。王安石の挫折以降、士大夫政治の主要な舞台は中央から次第に地方に転向し、朱子学者は三代の理想を掲げながら活発に地方政治を推進することで、中国の政治発展に絶大な影響を与えたのである。

本論文の「おわりに」では、王安石の政治思想を考察し、またそれを儒教の歴史的発展に関連させることで、王安石の学を中国の儒教政治思想の文脈で再把握する作業によって、中国歴史・政治の歩み方を内面から理解する作業の一助となったことを、本研究の学術的な意義として挙げるとともに、研究の現実的含意として、改革開放以降の中国における中央レベルの政治改革の限界を突破する可能性を地方から探るべきという点をも指摘している。

Ⅱ．本論文の評価

１．　学術的寄与

本論文の学術的な寄与としては、何よりも「政治思想家」としての王安石の理解の必要性と可能性を提起して、手堅い実証研究を通じて、彼の政治思想を復元した点を挙げるべきであろう。筆者は、当時の膨大、かつ多様な資料を巧みに読み直す作業を通じて、王安石に対するこれまでの一連の見解―たとえば、王安石が神宗の全幅的な支援を受けていた、また、王安石は制度を重視する制度主義者であったなどの説―へ疑問を投げることで、王安石の政治思想を研究すべき重要な課題として救い上げたのである。また、『三経新義』に対する本格的な史料批判を通じて、この史料が王安石の政治思想を十分に反映していることを論証することで、研究の可能性をも切り開いた。そして、『三経新義』の構成に合わせて、君主論、制度論、風

論文審査の結果の要旨

習論を中心に王安石の政治思想を描くことで、王安石の政治思想に対する内在的な理解に基づいて、その豊富な内容を提示したのである。前近代の中国においては、「正統と異端」の枠組みから一方的に非難されて、また、近代にはいってからは、西洋近代に類似した彼の政治改革への学問的な関心に隠れて、これまで本格的な学問的な議論の対象になってこなかった王安石の政治思想を、実証性と論理性を兼ね備えた研究を通じて、見事に復元できたことが、本論文のもっとも大きな学術的寄与と思われる。

次に、王安石に対する研究によって、朱子学の政治思想に対する新しい理解の可能性を切り開いたことも学問的な寄与として特筆すべきであろう。周知のとおり、朱子学は、中国はもちろん、日本、朝鮮半島、ベトナムにおいて、数百年間にわたって、もっとも重要な政治思想として君臨していた。本論文は、王安石と朱子学における士大夫政治思想としての共通点とともに、二つの思想の分岐の政治的な性格を中央政治から地方政治への転換という内容を中心に、明確に提示している。その結果、主に存在論に関わるテーゼとして朱子学の核心的な内容とみなされてきた「理一分殊」が、実は王安石が試みた中央政治を中心とする一元的な政治の挫折に対する地方の士大夫の政治思想的な応戦として現れた地方政治の自立の論理でもあったことが浮き彫りになった。このような新しい発見は、『大学』で提示された「身―家―国―天下」という政治的空間の分立が持つ同時代の政治的な意味を明確にすることによって、朱子学の政治空間に対する認識の理解を格段に深めたと評価できよう。また、このような理解は、本論文でも指摘している通り、朱子学を受け入れて政治秩序の形成にそれを用いた東アジアの諸国―たとえば、朝鮮王朝―の政治思想と政治史の研究において、新しい理解の展望を切り開いたのである。

２．　問題点

他方で、本論文に関しては次のようないくつかの問題点も指摘できる。

第一に、王安石の政治思想に対する論述においては、一次資料に基づいた手堅い実証が行われたことに対して、士大夫政治思想の朱子学への転換を取り扱う部分においては、史料的な裏付けがやや弱くなっている。たとえば、王安石におけるジレンマから「理一分殊」という解決策への展開は、必ずしも張載、程子、朱子などの思想家が残した一次資料によって史料的に支えられていない。彼らによって、王安石のジレンマが解決されたこと、また、その解決の結果が朱子学の形成へつながったことは客観的な事実であろうが、その解決が張載等による王安石のジレンマに対

論文審査の結果の要旨

する意識的な克服の努力の結果であるかまでは、本論文の提示している根拠だけでは言い切れない。その結果、本論文の展開において、もっとも重要な部分の一つである王安石と朱子学との継承と克服の過程において、政治思想の研究としては曖昧さが残されているといわざるをえない。

第二に、上記の問題と密接な関係を持つが、政治史と政治思想史の区別と関連付けが曖昧な部分が存在することも指摘すべきであろう。本論文の冒頭では、王安石に対するこれまでの研究が、政治史を中心にして行われたことに対する批判から、政治思想史からのアプローチを試みるという学問的立場が提示されている。その問題提起の意義は理解できるし、また、王安石の政治思想の再構築の意味も認められる。ところが、王安石が現実政治家であったことを考慮すれば、彼の政治思想を再構築した後は、そのような成果に基づきながら、政治史的なコンテキストを再び考慮に入れることで、政治思想と政治行動を総合的に再解釈する展開が当然期待される。とりわけ、朱子学者による王安石の継承と克服という課題には、この両方の要素が関わっていので、その課題を取り扱う第四章においては、政治史の再導入に対する明確な意識が要求されたと思われる。ところが、第四章では、冒頭の政治思想史を強調する方法とは異なる総合の論理が本論において提示されないまま、実質的に政治史と政治思想を総合する議論が部分的に展開されているように見える。そして、このような方法論的なの課題への意識的な対処がないからか、この章の記述には、曖昧な、あるいは、恣意的な解釈と見なされる部分が存在することは、本論文全体の周到さからしてやや違和感の残るところである。

Ⅲ．結論

以上のようないくつかの問題点は指摘できるが、それらはすでに述べた本論文の評価を大きく損なうものではない。「論文の概要」と「学術的寄与」とで指摘した諸点から明らかなように、本論文は王安石の政治思想を、一次資料に基づいて再構成し、それを中国政治思想史のコンテキストで新しく位置付けた、明晰かつ堅固な学術論文となっている。以上の記述から、本論文が博士（比較法学）の博士論文の判定基準のＤ、Ｅ、Ｆを満たしているといえよう。また、同判定基準のＡについては、王安石から朱子学への政治的な流れから、中国特色の社会主義の下での政治改革のダイナミズムを地方から探るべきという提言を行うことで、制度整備の政治的な基礎に対する示唆を提供している点、Ｂについては、朝鮮の朱子学との比較の手法などを使っている点、Ｃについては、中国の事例を取り扱いながらも、日本とアメリ

別紙１－２

論文審査の結果の要旨

カなどの最新の研究を十分に取り扱っている点で、それぞれ基準を満たしていると判断された。

　したがって、審査委員会は、本論文が博士（比較法学）の学位を授与するに十分値する優れた研究とであるとの結論で一致した。